

ラジオ放送開始100年の記念碑(1)

— 名古屋に残るラジオ塔 —

■公衆用聴取施設のラジオ塔

ラジオ塔とは戦前に建設された緊急放送用の「公衆用聴取施設」の通称名である。公園などに設置された高さ3m程度の燈籠風の建設物で頭頂部に内蔵の拡声器からラジオ放送が流された。ラジオ塔の第1号は1930(昭和5)年大阪の天王寺公園に建設された(写真1、現存せず)、愛知県では1933年に鶴舞公園胡蝶池畔に設置されたものが最初である(写真2、現存せず)。ラジオ塔は全国各地に展開されて1943年までに約470基が建設された。ラジオ塔のデザインは統一されていなく、金沢兼六園(写真3、現存)のように御殿造りの豪華なものもある。

終戦後は各家庭にラジオが普及してラジオ塔の存在意義が無くなり大多数の塔は撤去された、現在、全国に39基、名古屋市内には4基の残存が確認されている。



【写真1】天王寺公園のラジオ塔
出典：『こちらJOBK七十年』



【写真2】鶴舞公園のラジオ塔
出典：『目で見る名古屋の100年』



【写真3】金沢兼六園のラジオ塔
(2019年3月 筆者撮影)

■ラジオ塔の役割

日本のラジオ放送は1925(大正14)年に東京を皮切りに始まった。聴取加入数は1930年末で約70万件と普及率は5%と低かった、普及が低迷した理由は高価なラジオと聴取料月50銭(現在の1000円)を必要としたことによる。このため、ラジオ塔の主目的が緊急放送からラジオの普及促進に重点が移った。自宅にラジオを持たない人々はラジオ塔に集まり放送を聞いた。特に、中等学校野球大会(甲子園大会の前身)の実況中継は大人気であった(写真右)。

しかし、太平洋戦争が激しくなると戦況伝達と戦意鼓舞の放送が主になった。

(渡辺治男)

↓ ラジオ塔



中等学校野球大会の実況放送を聴く聴衆 京都丸山公園
出典：『NHK放送博物館だより』58号